

コートハウスの下に：

『八月の光』におけるメタファとしての中心 (1)

山 田 富 貴

本稿をまとめる契機となったのは、ジェファーソンの町の中心に位置するコートハウスの存在とそれが持つ象徴性が気になったからである。とりわけ中心性という概念は、南部という共同体において、いつの時にも持続的に保たれていなければならなかったが、それは共同体の存立をめぐる大きな前提になっていたからに他ならない。共同体を支えるキー概念ということになると、「秩序」「安定」「維持」ということになろうが、南部社会の「特殊性」を考える時、その秩序化と安定・維持が易々とは達成し難いものであったことは今更言うまでもないだろう。南部史の中の大いなる矛盾、奇妙な制度としての奴隷制度は、そしてその後の人種的葛藤は、秩序の安定を揺さぶり続けてきたのであり、それが故に共同体の維持をめぐる、その中心たる南部白人の中に複雑な心性を生み出してきたのである。南部における「奴隷制度」は、言葉の字義的な意味が喚起するやもしれない、圧倒的な力の支配による安定した従属構造を意味するのではない。奴隷という言葉の字義的な意味に引きずられないなら、つまり、諾々として主人の命に従う羊のような存在として奴隷を規定するある種の思い込みに陥らないとすれば、白人-黒人の関係は、主-従、あるいは支配-被支配という恒常的に定着した状態などでは決してなく、つまり、奴隷たる黒人は常に自由を求め、あらゆる形で抑圧に反抗することに心血を注ぎ、白人はそうした黒人奴隷の心情に脅え、絶えず不安と威嚇を以て向い合う、そうした関係に他ならなかったのだ。かてて加えて、国内、外からの人道主義的立場にたった批判に曝されるという外

憂にも、宗教、科学を含めあらゆるレトリック（でっち上げ）を駆使して、立ち向わなければならなかったのだ。そうした南部社会の根底にある安定なき安定を、不安定と言わしめないために、より多くの場合、象徴、ないしは神話といった機能を全的に活用することで、南部の共同体的アイデンティティーは保持することができた。南部人、とりわけ白人男性は、種々な形で、力と権威の存在を象徴化しようと試みた。コートハウスもまた、共同体の持つ秩序と権威を示す、極めて象徴化された存在だと言ってよいだろう。

そも中世から近世に至るまで、共同体は教会の尖塔が望見できる範囲、そして、時鐘の鐘の音が聞こえる範囲で形成された。つまり、一定の空間を共有するだけでなく、時間をも共有する人々の集りと考えられていた。クロノ・トポスの相関性から言えば、空間の共有性を堅く維持するためには時間の共有性が不可欠だった、とも言えよう。そこにおいてはじめて、秩序が観念として成立するのであり、その中心としての広場とそこに建てられた建造物は、秩序の観念を具体化する。共同体の中心としての建物は、共同体内における諸機能を果たすための「もの」そのものではなく、ちょうど大都会の摩天楼が富や権勢を象徴するように、集団としての人間の誇りや未来への自信といった理想がその細部に渡って表現される、メタファーとして、文字通り転義される。

こうした一般論はさて置き、南部の共同体の特殊性に目を向けてみる。

南部特有の共同体の形式は郡（county）であったし、現在でもそうである。郡役所所在地（county seat）の周りに馬で日帰りできる範囲に散在している各々のコミュニティは、土曜日に山車が出たり、野外劇があったりすると、それを目あてにする肥沃なプランテーションに住む農場主やその雇い人たちを、やせた砂地の丘や湿地帯に住む貧乏白人や自由黒人たちを、コートハウスの周りに送り出した。その当時、拘置所であり記録保管所であったコートハウスと、商店と法律事務所が軒を並べるコートハウスの広場は、實際上、広範囲な広がりを持つ南部の共同体の中心を成していた¹⁾。

とすれば、架空の地ヨクナバトゥファ郡にジェファーソンという郡役所所

在地を創り、『アブサロム、アブサロム！』においてその地図を示したフォークナーは、そうすることで南部的共同体のトポグラフィカルな典型を描いてみせたということになる。さらに、その地図のまさに中心にコートハウスと広場を位置づけたことは、一層重要な意味合いを持つことになる。何故なら、地図をテキストとして読むことは、地図制作者の都市の記述法を通して、都市の経験の仕方を読むことになるからだ²⁾。共同体内で中心性を強調するという南部固有の傾向について R. V. Francaviglia は以下のように指摘する。

強力な中心性をもつ共同体の配置という南部的の性質はまた、文化的な意味において多くの社会学者、人類学者により（大衆作家や小説は言うに及ばず）予見されていたかもしれない。彼らは長年、南部の文化や社会生活の中での郡役所所在地の重要性を強調してきたのだ。印象深いコートハウスはしばしば町の中心に位置し、南部の生活の忘れ難いイメージとなっている。つまりは、郡それ自体が、南部における重要な政治的単位となっているからであり、例えば、ニューイングランドの「形ばかりの郡」の多くと比べてみても、はるかにそうだと言えるのである³⁾。（傍点筆者）

北部の共同体としてのまとまりが、教会を中心とした宗教的結集力に求められるのに対して、南部のそれは、郡の持つ政治的、行政的な力に負っていると言えよう。と同時に、中心の役割が、「南部の生活」と切り離せない、例えば交通の中心であったり、情報の集積地であったりしたことは、もちろん中心という場所が劇的空間としての機能を果たしていたことをも物語る。人々は、何かを見、聞き、知るために中心という場所に集まり、そこでは常に何かが起こるのだ。

話を冒頭で触れた南部史の特異性に戻そう。北部などに比べ、南部の秩序維持という問題に関してはことの外大きな努力を要した。より緊密なコードの網を張りめぐらし、白人間の結束、つまり少数白人支配層（プランター）間の結束だけでなく、白人支配層と貧乏白人との間の心情的同調をも推し進め⁴⁾、そうでもしなければいつ崩れるともされない「安定構造」に共同体が

依拠していることを知り、常に恐れを抱き、警戒を怠らぬこと。したがって、中心化ということは、秩序維持のために強大な権力の存在を示すことであり、逆に排除を伴う周縁化を強力に推し進めることでもありえた。当然、権力の妻まじさは、排除の妻まじさでもある。「南部の生活の忘れ難いイメージを構成する」コートハウスと広場は、人々が群れ、時には興じ、時には凄惨な黒人リンチを見物し、あるいは決闘に固唾を飲み、といった具合に、共同体内での生活と掟が劇化される場でありえた。しかし、より本質的には、支配権力とそれに従属する存在を明確化したテキストを劇化する場であったと言えよう。M. フーコーになれば、コートハウスという建物自体は、狂気の視覚化として精神病院があり、犯罪の視覚化として監獄があるように、南部白人権力と白人優越を視覚化するある種の権力装置だったのである。

奴隷制度がシステムとして終わったとき、南部は共同体の構造を根本からくつがえされたのではなく、システムを再編成し、新たな「奴隷制」を築くことで、秩序の安定維持をはかった。人種主義の強化である。見える制度としての奴隷制度は、見えない制度として、意識の中の奴隷制度という形で強化されていくことになる。奴隷取締法はジムクロウ法と名を変え、「パトロール」は、かつての奴隷たちを用心深く見張る神経症的な看視の目へと変った。形と名称が変わったとしても、権力と見張りのための装置が取り除かれた訳では決してなかった。南部は、変化を頑なに拒絶することでより持続的に安定の擬制を保とうとすることになる。その結果、南部共同体の内部に深く、何事も起らなかったかのような平静さを装い、歴史の記憶は埋められていった。解読されるべき、テキストとしてのコートハウスと広場もまた、人々の生活の記録の保管や、憩いの場としての単なる社会的機能を果たすだけの「装い」の中で、歴史の記述、つまり、修辭的産物として体系化された事実の表出の中には表面化されることのない、歴史の記憶を深層構造に持つことになる。例えば、「主人は時には奴隷たちに優しかった」という記述が、「主人はいつも心の片隅で奴隷たちを恐れていた」という記憶を深層に持つ

表層的言述に過ぎないように。

1960年代に入って、黒人たちは完全な平等を求めて、コートハウスにつめ寄った。それを力ずくで押し返そうとする白人警官の姿は映像メディアを通してありのままにわれわれの知る所となったのだが、彼らのむき出しの黒人に対する憎悪は、整然と、押し黙ったまま白人の暴力に無表情に耐える姿とは余りの対照をなして映し出されている。黒人たちの表情には奴隷制の時代から差別法の時代を通しての、あるいは「中間航路」をも含めた、抑圧と被支配の歴史的記憶が語られているのであり、一方、白人のむき出しの憎悪の中にも、白人優越を当然とする不遜と背中合わせの、転覆的なものに対する恒常的な不安の影を、彼らの側に長く下意識の底に潜んでいる歴史的記憶として読み取ることができよう。公民権運動が掲げた「今こそ自由を！」というスローガンに見る「今」⁵⁾の中に、われわれは南部の歴史意識の反映を見る。それは過去そのものに向けられた意識の動きではなく、過去が現在へと収斂している、現在についての意識である。歴史の記憶は、そうした意識をその深部において支配する。60年代において、黒人が示した「抵抗」——それは途切れることなく、中間航路から奴隷制を経て、見えざる形で継続されてきたのだが——は、歴史意識の彼方から自ずと語り出す記憶の確かな所在⁶⁾を示すものだったと言えよう。

『八月の光』は、南部の集団的記憶をして語らしめた物語だ、と考えたい。語られた物語は、歴史意識を通して、あらゆる「今」を明確化し、同時に混沌へと導く。言い換えれば、歴史の中の「事実」（語られたもの）を、物語の内側でもう一度語り直すこと。歴史の中の「出来事」が、どう認識されたかによって、「何が起ったか」という問に対して解答を与えること、だとすれば、物語の中の「出来事」は、どう認識されなかったかという点から、「本当は何が起ったのか」という新たな問を投げ返すことで、「何が起ったのか」という問に対する解答を止揚する。要するに、秩序体（南部共同体内の論理であれ、共同体の幻想の中に閉じ込められた奴隷という制度であれ）が

自らを支えるために葬り去った異質なるものを、排除の闇（歴史の闇）からすくい上げること、それを『八月の光』のテーマとして読んでいきたいのである。

I

この物語が誰についてのものであるかはひとまず置くとして、登場するジョー・クリスマス、ジョアンナ・バーデンが読者に初めて語られる場面には各々共通した要素が認められる。すなわち、双方ともある中心的な場所との関わりから各々の存在が示されているという点である。ジョアンナの存在は次のような描写で物語の中に導入される。

ミス・バーデンは生れた時からその家に住んでいて、それでいてなお彼女はよそ者なのだ。再建期に北部から南部に移ってきた連中の子孫であって他国者なのだ。彼女は北部人で、黒人好きで、彼女の祖父と兄が州選挙の時に黒人投票の問題で旧奴隷所有者に広場で殺されてもう60年にもなるというのに、いまだに黒人との奇妙な関係が噂されている。(50) (傍点筆者)⁷⁾

クリスマスの場合はこちらだ。

彼は星を、空を、見あげた。『もう10時ちかくにちがいねえ』と彼は思った。そう思ったせつなに、2マイルむこうのコートハウスの時計を聞きつけた。ゆっくりと、測ったような間を置いて、はっきり10の音が伝わってきた。彼はそれらを数え、そしてまた寂しく人気のない道路に立ち停った。『10時か』と彼は思った。『俺は昨日の夜も10時を聞いたっけ。それから11時もだ。12時もだ。しかし1時は聞かなかったな。風が変ったせいかもしれねえ。(130) (傍点筆者)

両者は、トポグラフィカルな中心、すなわち、広場とコートハウスを中心とする座標軸上に位置づけられることで、その存在が明示されているのである。具体的に各々について考えてみる。ジョアンナは、「ただの一女性」(50)に過ぎない。しかし、「祖父と兄が黒人投票権をめぐる、旧奴隷所有者によって殺された」という、おぞましい歴史的事件が、60年という歲月

を経ても、そのおぞましきは風化することなく、町の人々の噂の種となり、
なお「おぞましき存在」として ^{アブジェクション}棄却されているのである。長い時間の経過が、事件を風化させないのは、「黒人投票権をめぐる問題」が、南部社会にとって許し難い屈辱であったからなのか、あるいは、「旧奴隷所有者」の存在が町の中で強力な力を握っていたという歴史的事実の故なのか、はたまた、兄、祖父が奴隷解放論者として、町の人々から受けた恨みの深さを物語るものなのか。というよりも、いまだにそうした「事実」が生延びているのは、事件が生起した「広場」という中心的な「場」に大きく起因しているのであり、そこに刻み込まれた人々の記憶の作用に与っているのだ。もとより、旧奴隷所有者が、奴隷解放論者たる兄、祖父を殺害する場合は、他のどこかであってはいけないのであり、もっとも殺害するのにふさわしい場所、つまり、人々の記憶の中に刻印するために、劇的効果を最大限に生み易い場所
でなければならなかったのだ。ここにおいて、人々の中に単に記録として残るだけでなく、記憶として残ることで、例えば噂というような恣意性を帯びた増幅機能を招き入れることになる。そうなることで、「おぞましき存在」として排除されるべきジョアンナ・バーデンなる「一女性」を、共同体にとって、より安定した座標軸上に位置づけ、異質なものの存在を明確に確認することができるのだ。ジョアンナとその屋敷に付された something outlandish (50) という表現は、共同体の内-外という場の対立を明示し、他国者と規定することで、ある秩序体の中心から見た外側を指差し、したがって、一方向的に脅威的 (threatening)、あるいは不気味な (dark) という雰囲気
を彼女の周りにつくり出している。内、あるいはその中心という概念の持つ意味装置の基本は、戦慄、恐怖、怒り、といった否定的感情をヒステリックに媒介させることで、中心としての機能 (南部、あるいはその共同体的性格の維持) をより高めていくことにあるのだ。

こうした中心的「場」を基点とする、内-外、中心-周縁という対立的認識パターンは、クリスマスの場合にも適用される。

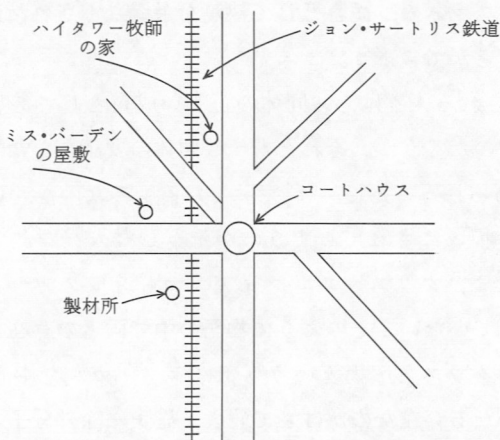
クリスマスが登場するのは、この小説の核心とも言える「事件」、ジョアンナの殺害に赴く場面においてである。殺害の前日、およびその当日のクリスマスの行動が語られることで、読者は彼の存在を知る所となる。前日、彼は眠り（平安）を得ることができず、「10時からベッドに入っているのにまだ眠れないでいる」(115)と考えながら、束の間の平安を願う。先の引用は、殺害当日、町で夕食を済ませ黒人街（Freedman Town）を通り抜けた時、コートハウスの時を告げる鐘の音を耳にし、昨夜は10時の鐘を聞いたことを思い起すくだりである。眠れない（したがって、平安を願う）クリスマスは、ベッドの中で、コートハウス（中心）から発せられる時を告げる鐘の音（信号）を聞いているのである。というより、鐘の音は一方的にクリスマスの元に侵入し、強迫的に時の進行を告げる。行動へ決起を促すと同時に、心の平安をかき乱すのだ。彼自身の自律的思考による決断がなされる以前に、あらかじめ思考そのものが呪縛されてしまっているかのように、彼は行動への意志を促される。殺害のためにジョアンナの屋敷へ向う直前の彼は、「何も考えようとはせず、また、思考はそれ以前から停止し、動くのを止めたまま」(130)じっと屋敷の前に坐り込んでいたのだが、「2マイル離れたコートハウスの時計が12時を打つのを聞いて、やおら腰を上げ、ジョアンナの屋敷に向って歩を進める」(130)のである。「ゆっくりとした足どり」(130)は、何かが起ろうとしているという身に迫っているある種の危機意識を、思考によって制御することができないという心理状態を指し示している。さながら、鐘の音と共に囲いの中にとり込まれる羊の群れのように、ある馴化された家畜のごとく、中心より送られる信号（鐘の音）を耳にすることで行動へと駆り立てられる。クリスマスという存在が引き受けざるを得なかった複雑な位相——黒人であるのか白人であるのか、あるいは黒人でもない白人でもない、あるいはまた、白人でもあり黒人でもある——を考える時、そうしたことの中に、共同体の恣意性に諾々として承服させてしまう、見えざる権力装置のありかを認めざるを得ない。同時に、異形の者として周縁に迫

いやられたクリスマスの、従容として隷属を余儀なくされた遠い記憶のあり
かも感じ取ることができよう。

「民衆」と称される人々は、共同体の正しい成員としてあらかじめ認めら
れたものを指すのだろうか。それとも、共同体の要請にかなう人々が、その
内側に招じ入れられることで、「民衆」となるものなのか。いつの時にも都
合よく「継子」扱いにされてしまうのがそうした人々のように思えるのだ
が、いずれにせよ、クリスマスもジョアンナもジェファーソンの町の「民
衆」とはなりえていない。そのように物語の中で両者の存在提示はなされて
いるし、コートハウスと広場というトポグラフィカルな中心との相関によ
り、定義上いかなる存在なのかはさて置き、確実に除外分子としての位置づ
けがなされているように思われる。

がしかし、ここで、序において触れたフォークナー自身が描いた地図につ
いて、いま一度検討し、「都市の経験の仕方が地図の描き方に反映される」と
いう観点からその意味するところをさぐってみたらどうであろうか。フォ
ークナーが描いた地図は、東西南北にのびる直線と直線が交差する地点に中心
を求め、そこにコートハウスを記した。そして、そこから放射状にのびる何
本かの直線と鉄道路線を書き添えた、まことに簡略化された、すっきりした
ものに過ぎない。が、こうした描き方は、フォークナー自身の想像によるも
のというよりは、フォークナーにとって、より安定した経験的知覚の中でと
らえられる、ごくありふれた、自然に思い描けるようなトポグラフィカルな
認識に基づくものだったと推察できる。ある意味で、たいがいの南部人が思
いつくような典型的な町の構図を図示したものだったとも考えられる⁸⁾ (次
頁図参照)。

フォークナーは南部人にとっていわば典型的な、したがって分り易い町
の見取り図を描いてしまったが、一方で、周縁的存在 (ハイタワー牧師、パイ
ロン・バンチ、ブラウンなどを含め) へと語りの中心を移行するにつれ、読
者は、このシンプルな地図の中に隠されている小道や路地をさがし求め、中



心から遠ざかる。しかし、除外された者たちの「居場所」は、除外されているが故に、あるいは、中心からはじき出されているが故に、見つけ出すのがなかなか困難であったり、ただ噂（あてにならないもの）を通してのみ「特定」することができるだけである。例えば、ハイタワー牧師の「居場所」についての説明はこうである。

彼は書斎の窓から外の通りを見ることができる。前庭の芝生が小さいから、通りまではさほど遠くない。それは5,6本の低いカエデの木が生えた小さな芝庭である。そして家自体も小さい——それはペンキも塗られていない茶色の目立たぬパンガロー風の家で、彼が通りを見守ることのできる書斎の窓のほかは、茂ったサルスベリとバイカウツギとムクゲでほとんど覆い隠されている。むしろ隠されすぎていて、通りの街灯の光はそこまで届かない。(61)

ハイタワー自身は、建物の中から外界をのぞくことができる「すき間（窓）」を媒介として、外との接点を持つことができる、しかし、草木で覆い隠され、街路の光も届かないために外部の人間の目には留まりにくいという、孤立した状況を、「居場所」についての外部描写によって知ることができる。このことは、牧師が町の人々（共同体）から除外されているという位相を示すものだが、同時に、実際に地図を描いて表示してみせた所で特定し切れな

いという事実をも指摘しているのだ。

クリスマスの「居場所」については、より信頼できる語り手と考えられるバイロンにより伝えられる。彼によると、

彼〔クリスマス〕がどこに住み、どこに寝ているのか誰も知らなかった。ただ時どき、町の端から森へゆく小道で彼を見かけ、彼がその方角のどこかに住むらしいなと思うだけだった。(38)

というのが、クリスマスに比較的近かったバイロンの認識であった。が、その後ブラウンが現われ、密造酒を作り、それを売るようになると、そうした人物からより詳しいクリスマスについての情報を耳にするようになる。がしかし、ブラウンにしろ、密造酒を買う者にしろ、さして信頼できる語り手ではないだけにバイロンにとっては耳にする情報も割引いて考えねばならなかった。それによると、

その場所〔クリスマスからウイスキーを買っていた場所〕は町から2マイル離れた古ぼけたコロニアル風の農園屋敷、バーデンという独身の中年女がひとり住んでいる屋敷の背後の森であって、そこへひとりで夜中にこっそり行っては彼から買っていたというのだった。しかしウイスキーを買っていた連中でさえ、クリスマスがミス・バーデンの屋敷の古ぼけた黒人小屋に本当に住んでいたのかどうか、それもこの2年間ずっとそうだったのかどうか、分らなかった。(38)

ということのようだ。クリスマスの「居場所」も、あいまいな情報を通してのみ推量できるだけであり、正確に特定することはできない。というより、謎めいた雰田気さえ漂う。とりわけ、密造酒と関わっているらしいという噂がそれに拍車をかける。フォークナーが掲げた地図の中では、およそ表記し切れない闇の周縁部があることを指し示している。さらにブラウンがシャツの下から密造酒の半ポイント壘をとり出して客に売りつける「町の路地」はいったいどこなのか、と考え始めると、一見分り易そうな地図の中に不可解なものが隠されていることに気づく。それは、見えざる存在が常に中心の安定に脅威を与えている図であるという言い換えもできる。とすれば、南部に

ありがちな、それ故に安定した町の風景を、あえてジェファーソンという共同体の姿として提示したこと自体が、ひとつのアイロニカルな試みだったと言えるのではないだろうか。

(続く)

〔註〕

- 1) Conrad M. Arensberg, "American Communities", *American Anthropologist*, 57, 1955, 1151.
- 2) 多木浩二『モダニズムの神話』青土社, 1985年, 291頁。
- 3) Richard V. Francaviglia, "County Seat Centrality as a Regional Trait", *The Geographical Survey*, Vol. 2, April, 1973, 6-8.
- 4) あらゆる白人間の協調についてケネス M. スタンプ (『アメリカ南部の奴隷制』彩光社, 1988年, 401-402頁) の次の記述を参照されたい。

「南部白人の大多数は奴隷を所有していなかった。それ故に少数奴隷所有者(奴隷擁護派の指導者)たちは奴隷を所有していない人々に、不倶戴天の敵は奴隷主ではなく黒人なのだと思わせようと図った。奴隷廃止論者達の思うようにしたら、貧乏人がどんなことになるか、今でこそ奴隷制が妻子を守っているが、それがなくなれば『夢にも思ったことのない恐ろしい有様』になるのだと恐怖の図を描いてみせた。」

「全ての白人がある意味で主人でいられるのは、アフリカ人奴隷制度のお陰であって……ここでは自由な白人と黒人奴隷とに分れていて、白人は誰でも一人前の人間であり、そう意識するのだ。」

「奴隷を所有しない者で、奴隷制に反対した例が皆無に近かった事実は、このような宣伝が効を奏したことを証明している。大部分の者が、黒人に対して根強い憎悪を感じていた。自由黒人が自分達と平等な地位を要求するのではないかと、強烈な不安を抱いていた。現状のままなら、貧乏ではあっても上位カーストの一員として権威は確保できたし、奴隷所有者と共に黒人をその地位に押し込めておく仕事も、誇りをもって分担していた。」

「奴隷がいるところでは、どれ程卑賤な白人も、自分は地域社会最低の身分ではないと意識し、その意識から、品性にある種の威厳が生ずる。」

- 5) Martin L. King の次の言葉は、黒人たちの「今」にかける思いを知る上で、示唆に富んでいる。

"How many people understood, during the first two years of the Kennedy administration, that the Negroes' "Now" was becoming as militant as the segregationists' "Never"?"

Why We Can't Wait (N.Y.: Harper & Row, 1964), p. 21.

- 6) John W. Blassingame は、南部の奴隷たちにとってアフリカ文化の継承、存続が隷属の身への反抗を示す一般的手立てのひとつだったことを指摘する。

アフリカの言語パターンは、2,3 世代を経てアメリカ南部では消滅したが、奴隷貿易が続いていた 18 世紀にはいくらかその名残りを留めることもあった。1830 年以降は全くアフリカ訛りの英語は話されることはなくなった。しかし、言語以外のアフリカ文化は、ヨーロッパの文化と融合しながらもなお執拗に残り続けた。19 世紀の奴隷の大半はアメリカ生れだったが、彼らは何らかの形で祖国の文化との接触を持ち、その物語を受け継ぎ、過去との繋がりを留めておこうとした。

“Clearly one of the general means by which Africans resisted bondage was by retaining their link with their past. Rather than accept the slaveholder's view of his place in society, the African tried to hold onto the African cultural determinants of his status. . . . Maintaining their native concept of beauty, many of the Africans never lost their revulsion for white skin and longed for revenge on the whites for their enslavement.”

John W. Blassingame, *The Slave Community: Plantation Life in the Antebellum South* (New York: Oxford University Press, 1979) p. 31.

蛇足ながら、Booker T. Washington は、黒人種にとっての過去が及ぼす影響について、否定的である。まして、記憶に刻まれた白人への憎悪や反撥のありかなどおくびにも出さない。

“The influence of ancestry, however, is important in helping forward any individual or race, if too much reliance is not placed upon it. Those who constantly direct attention to the Negro Youth's moral weakness, and compare his advancement with that of white youth, don't consider the influence of the memories which cling about the old family homesteads. I have no idea, as I have stated elsewhere, who my grandmother was. . . . My case will illustrate that of hundreds of thousands of black people in every part of our country.”

B. T. Washington, “Up From Slavery”, *Three Negro Classics* (N.Y.: Avon Books, 1965), p. 48.

こうした記述は、Washington 自身が目ざした白人社会への同化、を推し進めるために、黒人同胞に向けた「指南書」であると同時に、白人社会に向けた如才のないメッセージでもある。そういう意味では、受け継がれてきた奴隷の記憶に対して、否定的であるというよりは、拒否的である。したがって記憶の正しい認識（正しくは old family homestead を slave quarters とすべきである）のあり方につ

いて言及すべき性質のものではない。

- 7) *Light in August* のテキストは、Vintage Books 版 (1987 年) を使用した。引用頁はカッコ内の数字により示される。なお訳文掲載については、加島祥造訳『八月の光』(新潮文庫)を参照している。
- 8) ジェファーソンの町の地図は、フォークナーが生涯の大半を暮した Oxford の町がそのおおよその原型をなしていると考えられる。が、Oxford の町自体が典型的な南部の町の体裁を備えている。すなわち、主要道路が十字に交差する場所に広場ができ、コートハウスが建てられている。広場の周辺には商店、銀行、法律事務所などが並び、町の外部からどのようなアクセスをとっても、必ず広場に出られるような構造になっている。そして、広場からさほど離れていない地点に鉄道路線がひかれている。こうした町の体裁は、例えば隣り町の Holly Springs,あるいは New Albany などのコートハウスが存在する町もおおよそ似たような形態である。